この素晴らしい召喚者に祝福を

ヒロケン

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

最強の魔導師が死んでしまい転生する話です。

目次

第1話 …… 1
第2話 …… 7
第3話 …… 11
第4話 …… 18
第5話 …… 25
第6話 …… 31
第7話 …… 38
第8話 …… 45

第1話

俺が意識を取り戻すとそこは暗い場所にいた。
俺は辺りを見てみたら白髪の美しい女性がいた。
「新田陽平さん、死後の世界へようこそ。あなたはつい先ほど、不幸にも亡くなりました。短い人生でしたがあなたの人生は終わってしまったのです。」
「……はぁ、やっぱりか。」
どうやら俺はやはりあの時死んでしまったらしい。

死ぬ前

俺の名前は新田陽平だ、俺は普通とはいえない高校生である、なんで普通ではないのかと言うと、実は俺は

魔法使いなのである。

といっても俺が使う魔法は科学の延長みたいなものだ。
それでなんで魔法使い、もとい魔導師なのかというのは、俺が幼稚園に入る前に森に探検に行っていたときに、何か光る三角のアクセサ

リーを見つけて見ていたら何とそれが喋りだしてどうやら俺が見付けたのはデバイスと言われる物で俺は何とこの歳でＡＡＡ＋と、とんでもなく多くてしかもまだまだ成長の見込みがあったそうだ。
　それでそのデバイスの名前はトリニティというので、扱う術式は古代ベルカと言われる物で、俺にはそれを扱えるらしい、それでベルカについて聞いてみたら、俺達が住んでる地球以外にも惑星があり、それを管理する管理局というのがあって、その中心がミッドチルダという世界らしい、それよりも遥か昔にあったのがベルカらしい。
　その時代は戦が当たり前のように起こっていて、当時トリニティを持っていた物が逃げてここ地球に来たのだが、ここで力尽きて死んでしまい、そのまま取り残されたらしい。
　しかもトリニティは当時の数々の猛者達と渡り合ったらしい、例えるなら、まず覇王と言われたクラウス・Ｇ・Ｓ・イングヴァルトと聖王のオリヴィエ・ゼーゲブレヒトに夜天の書のプログラムの烈火の将シグナムに鉄槌の騎士ヴィータと盾の守護獣ザフィーラに湖の騎士シャマルと初代夜天の書の主ともやりあったらしい。
　当時の俺はそれを言われてもピンと来なかった。
　話を戻して、俺はトリニティに言われて持ち帰り翌日から魔法の修行を始めた。

　それから数年たって俺は幼稚園に通うようになって五歳になって、いつも特訓している場所の近くの公園によったら、俺と同い年で同じ幼稚園の”高町なのは”ちゃんが俯いてベンチに座っていたな。
　俺は気になって話しかけたら「なんでもないの」と返されたので俺は魔法の特訓を中断して遊びに誘ったら、最初は遠慮していたけど俺が無理矢理遊んであげたら、だんだん笑うようになって途中から楽しそうにしてくれたな～と思った。
　高町なのはちゃんと遊んでいたらすっかり夕方になってそろそろ

帰ろうかと思っていったら寂しそうになっていたので俺はまた明日この公園で遊ぼうねって誘ったら花を咲かせたかのように笑顔で頷いてくれた。

翌日以降、ほぼ毎日公園で会うようになって、なんで最初はあんなに悲しそうなのと聞いたら、どうやらお父さんが入院しちゃってお母さんやお兄ちゃん達が忙しくて構ってもらえなくて悲しかったらしい。

俺はそれを聞いて俺は何とかしてあげたいと思い一緒に高町のお母さんの所に向かって、高町のお母さんである高町桃子さんに「なのはをもっと構ってあげてください」って頭を下げたら、高町家の皆さんは戸惑いながらもなのはちゃんを受け入れてくれた。

その日の夜には俺はなのはちゃんのお父さんが入院している病院に行って、トリニティの回復魔法（？）である”復元する原初の世界”ダ・カーポゼロを使い怪我をする前の状態に戻した。

そのあとはなのはちゃんのお父さんも戻ってきて家族仲良くなっていったらしい、そのあともなのはちゃんと遊びながら魔法の特訓をしていき俺が9歳になった頃、とある事件が起きて、その事件が原因でなのはちゃんは俺と同じ魔導師になり事件を一緒に解決していき、どんどん仲間が増えていった。

今では俺は傭兵として働きながら高校生活を行っている。

ちなみに高校にはなのはちゃんと他の魔導師は皆既に管理局に入っており高校には入っていない。

そんなことがあって俺は普通に過ごしていたけど、とある仕事を受けてとある場所に来たのだが何も無くて呆然としていたら突然銃声が聞こえて何も出来ずに心臓に当たり俺は死んでしまった。

そして冒頭に戻る。
「あれ？あんまり驚かれないんですね？」
そう目の前の人に尋ねられた。いや、「人」と言うにはあまりに美しい。ここが死後の世界だとしたら、女神とか天使的な存在なのだろう。
「ええ、何となくそんな予感はしていたので」
そう。あの瞬間、俺は自らの死を悟ったのだからな。

「ごほんっ、では改めまして初めまして新田陽平さん。私の名はエリス。日本において、若くして亡くなった方々を導く女神です。さて、亡くなってしまったあなたには2つの選択肢があります、1つは元の世界で人間として生まれ変わり、新たな人生を歩むか。そしてもう1つは、天国的なところでおじいちゃんみたいな暮らしをするかです。」
随分と身も蓋もない選択肢だな。
「でも、天国的なところといっても、あなた達が想像しているような素敵な場所ではないんです。死んでるんですから食欲などの3大欲求は意味を成しません。そもそも体がありませんしね。そして、娯楽のひとつだってありはしないんです。」
それはちょっと嫌だな。それなら俺はあらたな人生を送りたいな。
「それに実はもう1つ選択肢があるんです、実は、とある世界で魔王や魔物的な存在が跋扈してるんです、そしてその世界で亡くなってしまった方達はその恐怖から、同じ世界での転生を希望しなくなり、魂の数が足りなくなっちゃってるんです。」
「なるほど。だから他の世界から人を転生させればいい。そういうことですね。」
「はい。その通りです。言うなれば移民政策みたいなものですね。」
「なるほどそういうことですか。」
「それに伴って天界規定で転生する方には1つだけ好きなものを持って行けるようにしてるんです。」
「え？それって何でもありですか？」

「ええ、可能です。」
「それなら俺は自由召喚を望みます。」
「自由召喚とは？」
「はい、それは俺がこれまで出会った人物とアニメはゲームに出てくるキャラを召喚することが出来るようにしてほしいです。」
「それは可能ですけど、その代わり代償として最初に召喚した場合は大量の魔力を失い、相手に納得して貰わないといけませんよ、まぁ、その代わりに相手が納得してくれたのなら次に呼び出す時に楽に呼び出す事は可能です。」
「はい、それでお願いします。」
「ではその円の中から出ないようにしてください。・・・　では、あなたの冒険に幸多からんことを!!」
　そして俺は旅立った。

その一方

どうも私の名前は高町なのはです、私はとある報告を受けて病院に向かっています、その報告とは

伝説の傭兵　新田陽平の死亡

私は信じきれず運ばれた病院に着いたら、丁度フェイトちゃん達もついて病室に入ったらはやてちゃんが椅子に座ってリインフォースに抱きつきながら泣いていていてシグナムは手を強く握りヴィータも床に座り俯いてシャマルははやてちゃんを励ましていて、中心のベッドには陽君がいてその顔には白い布が被っており私は恐る恐る近付いて白い布をどかしたら息を引き取った陽君がいた。

私は悲しくなりその場に崩り倒れ陽君に抱きついて

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん!!!!!陽君~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~!!!!!」

今日、私達は

最愛の彼を失った。

第2話

俺は女神に送られて来たのは当たり一面草原の辺りだった、それで俺はポケットに何か入っていたのでそれを見てみたら何やら銀貨が入っていて俺は町が少し離れたところにあったのでそこに向かった。

暫くして町に着いたので冒険者になろうかな?と思って探しているとそれらしき建物があったので入ってみたら酒場らしい雰囲気に奥にはカウンターがあってそれに冒険者らしき人がいたので俺は入ってみた。

「あ、いらっしゃいませー。お仕事なら奥のカウンターへ、お食事なら空いているお席へどうぞー!」

そうウェイトレスのお姉さんに案内される。どうやら思っていた程荒れている場所ではないらしい。

内心ほっとしながら俺は真っ直ぐにカウンターへ向かう。

受付には4人の職員がいたが、丁度今は誰も並んでいない。

俺は気にせず近くのカウンターに入った。

「はい、今日はどうされましたか?」

「冒険者になりたくて来ました。」

「そうですか。では登録手数料が掛かりますが大丈夫ですか?」

俺はそれを言われてポケットの銀貨を思い出して。

「これでたりますか?」

「はい、大丈夫ですよ、では、こちらの書類にご記名の上、ご自分の特徴などを記入してください。」

俺は言われて特徴を書いていった。

「はい、ではこちらのカードに触れてください、それであなたのステータスが分かります、その数値に応じてなりたい職業を選んでください、経験を積むことにより、選んだ職業によって様々な専用スキル習

得できるようになりますので、そこも踏まえて職業を選んでください。」
俺はカードに触れた。
「……はい、ありがとうございます。アラタヨウヘイさん、ですね。えっと……。」
暫く見ていたら。
「こ、これは生命力を始め筋力、敏捷性が極めて高いとともに知力もとんでもなく高いし運は平均よりも高いですし魔力に限っては見たことがないほどですよ、これならどんな職業を選ぶ事が出来ますよ。」
「そうですか、それでどんな職業があるんですか？」
「例えば魔法を使うならアークプリーストとかとソードマスターもありますが、１つ聞いたことがない職業の召喚師というのがありますね。」
召喚師か、おそらく俺の特典の影響なのだろう。
「ならその召喚師にしようと思います。」
「では、冒険者ギルドへようこそアラタ様！スタッフ一同、今後の活躍を期待しています！」
そうして俺は冒険者になった。

冒険者になってどうしようか悩んでいる、お金はまだまだポケットに入っているので宿の心配はない。
それで俺はカードのスキルのことを思い出して見てみたら何とスキルポイントが

スキルポイント　１０００

はっ!?ちょっと待って、確か平均は１０とかだったと思うけどなんで１０００なの!?何で!?もしかしてバグった!?
俺は暫く混乱したけどもう大丈夫、まぁスキルポイントは気にせずスキルを見てみたら

スキル一覧
人形召喚　３　人や人の形をしたものを他の異世界から呼び出す事が出来る。
魔物召喚　２～５０　魔物を召喚することが可能になる。（勿論異世界からも可能）スキルポイントを多く払えば強力な魔物も召喚可能
神族召喚　１００　神の化身等を異世界から召喚可能にする。
隷属　１０　召喚した者を隷属することが出来るようになる、ただし相手に納得して貰わないといけない。
低コスト召喚　１～９９　召喚に利用する魔力をスキルポイントを多く払う程に減らすことが可能。（最大９９％）
多重召喚　２～１００　同時に何体でも呼び出す事が可能。（最大１００人（体））
居合　２　居合を扱えるようになる。
二刀流　５　あらゆる武器を両手で扱えるようになる。

魔力纏　１０　武器に魔法を取り込んで強力な武器にすることが可能になる。
全魔法　１００　全ての魔法を使えるようになる。
魔力抑制　３～７５　魔法を放つ時に必要な魔力を抑える事が可能。（最大７５％）
詠唱破棄　５０～１００　魔法の詠唱を無くすことが可能、だがその代わりに威力が半分から四分の三程になる。
詠唱中略　１０～５０　魔法の詠唱を短くすることが可能、だがその代わりに詠唱が短くするほど少しずつ落ちる。
反射　１００　あらゆる攻撃・魔法を反射することが可能。（勿論ＯＮ、ＯＦＦ可能）
破壊　５００　あらゆる者を破壊することが可能。
時間操作　９９９　時間を操ることができる。

うん、なんだこれ!?!?!?まず神族召喚って何だよ!?神の化身ってヤバイだろ!?!?!?それに最後の3つは人間が持っていていいものでは無いぞ!?!?!?

また混乱したので落ち着かせてようやく現実を受け止める事が出来たので俺は破壊と時間操作以外の全てを会得した。
それで俺は早速人形召喚を使い俺は元の世界の皆を呼び出した。

第3話

どうも高町なのはです、陽君が死んでから七年が過ぎました。
あれからは陽君の葬式をミッドチルダと海鳴市の両方で行ったら、それぞれ凄い数の人が来て悲しんでいました、その中には私が教えたスバルやティアナの家族も居ました。
陽君を失った悲しみで暫く仕事に手がつかなかった、けど何とか立ち直って仕事を再開して今から四年前の機動6課をはやてちゃん達とやっていってJS事件が起きて私達が解決して、その時に保護したヴィヴィオを引き取って今は平和に暮らしています。
今日は陽君の七年目の命日なので知り合い皆とお墓参りに来ています。
「もう7年だね……。」
「そうやな。」
「もしも陽平が生きていたらJS事件の被害も抑えられたかもしれないね。」
「……なのはママ、その陽平さんってどんな人だったの？」
ヴィヴィオが聞いてきてそれに同調するかのように最近友達になったアインハルトちゃんとジークリンデちゃんとリオちゃんにコロナちゃんも見てきた。
「そうだね、一言で言うなら極端なお人好しだよ。」
「それに笑顔が眩しくて困った人を頼っておけないひとで何でも首を突っ込んでくるんや。」
「それに弱さも見せないでいつも1人で背負っていたよ。」
「そして誰よりも努力を惜しまない人でもあったよ。」
私達が懐かしくなりながら話をしていたら突然地面が光だした。
「え!?これは!?」
光が収まったと思ったら見たことがない場所にいた。
それだけど布団の所に信じられない人がいました。

「まさか、本当に成功するとは、それに何人かわからない人までいるとは思わなかったな、それに何でか成長してない？」

私達の想い人がそこにいたのである。

「……陽君???」

「あぁ、俺の名前は新田陽平だよ、えっと、なのはちゃん？」

「陽君!!!」

私達は抱きついた。
「ごめんな心配させて。」

そのあとは俺の事情を話して皆の話も聞いたらどうやら俺が死んでから七年たっていてその間に起こった事件の事を聞いた。
「まさかなのはちゃんがお母さんをしているとは思わなかったな。」
「えへへ～そうかな～……。」
他愛ないことを暫くはなして本題に入ることにした。
「だから皆には協力して欲しいんだ。」
「勿論だよ！」
皆頷いてくれて俺はそのまま1日皆と過ごした。

翌日おれはギルドに訪れていた、そこでとある依頼を受けに来た。
それはジャイアントトードというモンスターの討伐である。
それで平原に着いてみたら想像以上にデカイ蛙がいたが、俺はそれを気にせず剣を取り出して、二刀流にして挑んだ。
まずは奴に近付いて足の辺りを切って体勢を崩して頭を切りつけたら動かなくなった。
そのあとは順調に倒していき今は８匹程倒してギルドに戻り報告したら報酬の１４万の値が頂けた。
しかしまだ昼前なのでもう１つ受けようと思い依頼状を見てみたらゴブリンの討伐があったので受けて森に向かった。
暫くしてゴブリンの住む森があったので入って探していたらゴブリンの群れが３０匹ほどいたので俺は早速魔物召喚を使い狼と思われる初級魔物を１０匹程呼び出してゴブリンに攻めていき俺は魔法の１つである上級魔法のサンダーボルトを使い次々と時間を掛けずにあっさり終わってしまった。
大したことないなと思いながら町に戻ろうとしたら何やら強力なモンスターが出てきた。
そいつはここに来る前に受付の人が注意していた初心者殺しというモンスターだった。
俺はすぐさま魔物召喚で上級魔物の狼を呼び出して攻めるように指示を出して俺は次は爆裂魔法のエクスプロージョンという奴の詠唱を短くして放ったら、狼は上手く避けてくれて初心者殺しに当たり見事討伐が出来た。

俺はギルドに戻った頃には夕方になって報酬を受け取ったらなんと１９万と５０万の合計６９万も貰った。
５０万は初心者殺しの報酬だそうだ。
それで俺は宿屋に向かったのだが、飲食するところにジャージを来ている男がいたがもしかして他の転生者か？と思ったけど俺は気にせず宿屋に帰っていった。
それに今日はなのはちゃん達を呼んで俺のデバイスであるトリニティを持ってきてくれるらしいのでそれを楽しみにして、明日は最難しい依頼を受けようと思った。

どうもはじめまして、俺の名前は佐藤カズマだ、俺は転生者で前世で忘れたい死に方をして転生したんだけど、その特典で俺は女神であるアクアを呼び出したんだけど、本当に役に立たなくてどうしようか悩んでいる、おまけにお金を持っていなかったで土木作業でお金を稼いでようやく冒険者になったんだけど、俺は最弱職でアクアはアークプリーストという上級職についたんだけど回復以外は全く使えないし、借金はしまくるしでろくでもない。

それで先日パーティーを作り募集をして来たのは厨二病爆裂魔法少女ことめぐみんが仲間になってしまったのだけど、めぐみんは爆裂魔法しか使えなくておまけに一回使ったら魔力切れを起こして動けなくなるというとんでもないやつである。

その帰りにパーティーに入りたいという女騎士がきたが俺は嫌な予感がして断った。

それで今はジャイアントトードの唐揚げを食べていたら歓声が聞こえてその中心を見てみたら腰に二本の剣を持った背が１９０という高さに筋肉質の男がいた、騒いでる奴に聞いてみたら、なんと二日前に冒険者になったばかりで昨日は来なかったけど今日は朝から来てジャイアントトードの依頼を受けに来て、それをお昼前に８匹も倒して戻ってきてそのあとはお昼を食べて今度はゴブリン討伐に向かいそこで何と偉業の３０匹を倒して、おまけに初心者殺しという危ないのに出くわしたのに、それすらも倒して来たらしい。

何だよ!?どれだけ強いんだよ!?それに彼はソードマスターかと思ったけど、どうやら魔法も使えるらしい、アークウィザードなのか？と考えていたけど、どうやらこれまで見つからなかったという召喚師という職業らしい。

召喚師!?それは凄いな、けど見つからなかったということはもしかして転生者で特典の影響では？と考えアクアに召喚を可能とするものを聞いたら、１つだけあるらしい、それが多分自由召喚というものでアニメやゲームのキャラや魔物をを呼び出して戦わせるのだそうだ。

ていうか、ズルイ!!!そんな強力な特典羨ましいと見ていたら向こうも俺に気づいて目があったけど気にせず帰っていった。

俺は決めた、何がなんでもアイツに接触してパーティーに入って貰おうと決めた。

第４話

俺は依頼をこなした夜に宿で夕飯を食べた後部屋にてなのは達を呼び出して色々話してトリニティを渡してもらって再会した、そのあとは寝るまで話して別れた。

翌日俺は早朝から来て依頼を探していたらウェアウルフというモンスターの討伐というのがあってそれだけでなんと３００万というのでそれを受けて行こうと思い人目のつかない所でトリニティをセットアップしてインビジブルという透明になる魔法で姿を隠して空を飛んで向かおうと思う。

「それじゃトリニティ、またこれからも宜しくな!!」

『はい、宜しくお願いします。』

数十分後に目的の場所に着いてみたら森があってウェアウルフはその森の中央にいるらしいので向かった。

暫くして場所が開いた場所について辺りを探したら体長三メートル程の銀狼がいた、その狼こそがウェアウルフなのである、俺はそいつに近づきながらトリニティを双剣モードにして近づいたらウェアウルフは気づいて俺に高速で近付いてきて俺を噛み殺そうとしてきたので俺はそれを紙一重で交わしながらウェアウルフの足を切り動けなくして奴の頭に剣を突き立てて討伐しようとしたら、森の方から超高速で何かが襲って来たので俺は慌てて避けたらウェアウルフの近くに体長１０メートルはあるんじゃないかと思える銀狼がいた。

それで暫く観察していたら。

「済まぬが娘を殺さないでやって来れ。」

なんと銀狼が口をあけて話しかけて来た。

「!?今話したのはお前か？」
　俺が確認すると銀狼は頷いて
「そうだ、我はウェアウルフのさらに上位個体のサウザンドウルフ、そしてこのウェアウルフの母だ。」
「サウザンドウルフ……確か千年を越えて生きる事が出来る伝説の狼と聞いたな、まさかその正体がウェアウルフの上位個体とは……けどそのウェアウルフは近くの住人に被害があるから討伐しないといけないのだが。」
「それは、誤解何だ。」
「誤解とは？」
「この子は単純に遊んで欲しくて住人に構っていたのだが、この子は力が強すぎてさっきも「人間だ、遊ぼう!!!」となってしまってね。」
　確かにそう言われて思い出してみると、殺意を感じなくて構って欲しそうにしていたなと思った、けどこの子が大きくて力も強いから普通の人間は遊べないだろう、それで思い付いたのは、使い魔だ、使い魔なら知能も上がるし力のコントロールも可能になる。
　その事を話したらサウザンドウルフは是非と言ってくれたので早速使い魔契約をしたら、見事使い魔にすることが出来て人間の状態は活発な女の子だった。
「それでサウザンドウルフ、あんたはどうするんだ？」
「私は……どうしようかな？」
「……だったら俺についてくるか？」
「そうだね……分かった、着いていくよ。」
　了承してくれたのでサウザンドウルフとも使い魔契約してつれていくことにした、それでお互いの名前は、子供の方はベルで親の方はアイギスと決めた。
　そして依頼はどうなるかわからないけどこれはこれで満足だ。

ベルとアイギスと一緒に町に戻り報告したらそれでも成功報酬を貰えたので満足して丁度お昼だったので三人でご飯を食べていたら昨日見かけたジャージの男が近付いてきた。
「なぁ、ちょっといいか？」
「なんだ？」
「ちょっと二人きりで話したいんだけどいいか？」
「別に構わないよ、それじゃアイギスとベルはゆっくり食っていてくれ。」
俺は二人に伝えて席を立ちついていったら路地裏に来てそこには青い髪の女もいた。
「それじゃ単刀直入に聞くけど、あんたは転生者か？」
「あぁ、そうだよ、そう聞くということはあんたもそうなんだな。」
「やっぱりか……それで聞きたいんだけど、あんたは転生特典は何にしたんだ？」
「俺は自由召喚というやつで様々なアニメやゲームのキャラやモンスターを呼び出す事が出来る特典だよ。」
「やっぱりか……。」
「それで俺は答えたんだからあんたの特典も教えてくれよ。」
「あ、あぁ、俺の特典は……。」
？なんだ？答えにくい物か？それで疑問に思ったら隣の青い髪の女に目を向けた、もしかして……。
「もしかして隣の人か？」
そう問いかけたら頷いて青い髪の女が胸をはって来た。
「私は水の女神のアクア様よ、敬いなさい!!」
今話したけど、なんだろう、何かバカっぽい、知能が低そう、けど女神ということは役に立ちそうではあるな。
「女神ということは役にたつんじゃないか、凄いの選んだじゃん。」

俺がそういうと女神は胸をはっていたが、男の方はプルプル震えて俯いている。

「…………ん　な　訳　ねぇぇぇぇぇぇぇ　だ　ろ　う　か　あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!!」

何でか突然騒ぎだした。

「こいつはバカで役立たずで傲慢だし借金を作りまくるわ戦闘も出来ないような奴だぞ!!!回復しか役に立たないし!!!」

「ちょっと!!!バカって何なのよ!!!」

それから暫く言い争って漸く収まったので話を続けた。

「まぁ、色々分かったよ、それで?話は終わりか?」

「あぁ、済まねえ、それで頼みがあるんだよ。」

「頼み?」

「どうか、俺達のパーティーに入ってください!!!」

土下座して頼んできた。

「おいおい、流石に土下座はやめてくれ、頭を上げてくれ。」

頭を上げて向き直ったので。

「済まないが、俺はさっきの二人とやっていきたいのでパーティーには入る事は出来ない、けどその代わり、俺達が暇な時は一緒に依頼を受けてもいいよ。」

「!!ありがとう!!」

「それじゃ戻ろうか、あの二人とも多分だけどまだ食べて無いだろうし、こいよ、序に一万以内なら奢ってやるから、あともう一人も連れてこいよ。」

「え!?いいのか!?」

「あぁ、構わないよ。」

そのあとはお昼を三人に奢ってやってお互い自己紹介したら男は佐藤カズマで青い髪の奴はアクアで紅魔族の女の子はめぐみんという名前らしい。

昼飯を食べ終わり俺達はアイギスとベルの実力を測る為に依頼を探していたらどうやらダイヤモンドゴリラというモンスターの６体の討伐が有ったのでそれを受ける事にした。

ちなみに成功報酬は２７５万だそうだ。

それでダイヤモンドゴリラがいるという鉱山に着いたら何と回りは見たことがない鉱石等があり、ここの鉱石はダイヤモンドゴリラが好んで食べるので手を焼いてるみたいだ、それで暫く坑道を進んで行ったら１０体はいるであろうダイヤモンドゴリラと一匹だけとんでもなくデカイダイヤモンドゴリラがいた。
「おいおい、一匹とんでもない奴がいるぞ。」
「あれは恐らくダイヤモンドゴリラの変異種のクリスタルゴリラですね、クリスタルゴリラはダイヤモンドゴリラよりも固くて強いと言われていて、特別報酬もとんでもなくあるらしいです、まぁ、私よりも弱いけど。」
「そうなのか。」
ちなみにアイギスは特別報酬として１０００万だそうで、クリスタルゴリラは７５０万だそうだ、しかも余り傷ついてなかったら死体だけで最高５００万も貰えるらしい。
それとアイギスの死体は９００万らしい、何でもアイギスの死体は色々と使い道があるらしい、勿論アイギスの特別報酬も貰ったぞ。
「それじゃお手並み拝見と行こうか、頼んだぞアイギスとベル。」
「うん!!任せて!!」
「承ったわ。」
まずベルが突っ込んでダイヤモンドゴリラの弱点であろうダイヤ

モンドの隙間の所（首周り）に爪で切り裂いてい一撃で一体倒していきアイギスは風や水、炎から光と色々な魔法を扱えるらしいのでそれを使ってクリスタルゴリラに色んな場所の隙間を風の魔法で切り裂いて行く。

暫くして全滅させたので労った。

「二人ともお疲れ様、さすがウェアウルフとサウザンドウルフと言った所だな。」

「うん!!凄いでしょ!!誉めて誉めて!!!」

ベルが抱き付いてきて誉めてと言ってきたので。

「あぁ、ベルは凄いな～。」

頭を撫でてあげたら目を細めて嬉しそうに身を任せた。

けどこれ以上抱きつかないで欲しい、何でかって?それはね、ベルは身長は１６０とあってスタイルが抜群なのだ、ここに来る前体を守る防具を買ったときに胸のサイズを合わせたらなんと１００センチという、サイズでいうならＧカップという化け物なのだ、ちなみにこのサイズで俺の身内にいるとしたらフェイト並だ。

まさかこんなにとは思わなかったな……。

「アイギスもお疲れ様。」

「まぁ、大したことは無いわね。」

それとアイギスのスタイルは身長は１９０と俺と同じ位で胸は驚愕の１２０という爆乳でＫカップらしい、それと身内ではすずかの次だな、それに二人とも出るとこは出て引っ込んでいる所は引っ込んでいるというスタイル抜群なのである、それにベルは銀髪の胸の後ろ所まであるロングでアイギスは腰の所まであるさらさらな髪の毛なので道行く人達の視線が余りの美貌に見てしまう程なのである、おまけにそれに狼の耳と尻尾迄あるので美人と言えるだろう。

それからはギルドに戻って報告したら成功報酬の２７５万と死体は１０体の一体３０万で３００万になってクリスタルゴリラの７５０万と死体の５００万で合わせて１８２５万も貰えた、今日だけでなんと３１２５万も儲かってしまった。

おまけにレベルも４０と上がっていてスキルポイントもさらに４

００もあった、どうやらレベルも一つ上がる度に１０ポイント貰えるらしい。

それに何やら新たなスキルも増えていた、それはこちら。

妖精召喚　３～１００　妖精を召喚することが可能となります、それと妖精を使役出来ればその属性の魔法を更に強くすることも可能になる、最大までスキルポイントを払ったら最上位クラスの妖精を召喚可能になる。

悪魔召喚　４～２００　悪魔を召喚することが可能となります、最大までスキルポイントを払ったら魔王クラスの悪魔を召喚可能となる。

魔神・邪神召喚　２５０　魔神・邪神を召喚することが可能となります。

この３つが増えたので俺は妖精召喚の１００と余ったポイントで悪魔召喚の２００と魔神・邪神召喚の２５０ポイントを使った。

ちなみに残りの４５ポイントは使わずにした。

第5話

アイギスやベルの実力を知った日の夜、俺ははやてにとある頼みをしている。
「はやて、出来たらこのトリニティに新たな機能として居合用の刀と様々な武器の二刀流のモードを追加して欲しいんだ。」
「居合用の刀と色んな武器の二刀流やな？いいけどその間トリニティ使えないけどいいんか？」
「構わないよ、その間はこの剣と魔法とアイギスとベルの二人に任せるから。」
「わかったわ、それじゃ預かるわ。」
トリニティをはやてに預けた。
「あとそれと出来たらだけど皆には向こうの世界のアニメやゲームの情報が欲しいんだ。」
「うん、分かったよ。」
頼んだらなのはが返事してくれて他の皆も頷いてくれた。
「あ、だったらこのゲームのはよくない？」
はやてが勧めてくれたのはデビルメイクライ5という奴で俺が死んでから出たゲームだそうだ。
「これって俺がやっていたデビルメイクライの続編なのか？」
「そうやよ～、陽平君はこのゲーム好きやったな～と思ってやってたんよ、難易度を上げたらとんでもないやつやったわ。」
「まぁ、確かにイージーは大丈夫だけど難易度上げたら鬼畜だからね……けどそれならいいかもな、あれは悪魔とか出るけど今日ので悪魔とか召喚出来るようになったからね。」
俺は皆がいるので早速ＤＭＣの主人公であるダンテとネロを呼び出した、どうやら姿はＤＭＣ４の姿だった。
そのあとは二人に事情を話してダンテは引き換えに、オリーブ抜きのピザとストロベリーサンデーだった。
それなら問題なく作れると思う、材料はこっちの世界でも元の世界と似たような物ばかりだから問題ない。

それでネロは特に問題なくやってくれるらしい。
それで二人を元の世界に戻して次は俺がやっていたゲームのステラグロウからアルトと魔女の五人を呼び出した、どうやら皆は既に月での出来事を終えて数年たつらしい。
それで話をして協力を頼んだら是非ともと言ってくれた、それからアルトはヒルダと結婚したらしい。
そのあとはなにもせず皆帰らせてその日は寝た。

翌日俺達がギルドに向かう途中何やら放送があった。
『緊急クエスト！緊急クエスト！街の中にいる冒険者の各員は、至急冒険者ギルドに集まってください！繰り返します。街の中にいる冒険者の各員は、至急冒険者ギルドに集まってください！』
そういわれたので俺はギルドに向かったら冒険者が集まっていたので事情を聞いたらこれからキャベツが来るらしい、最初聞いた時ははぁ？と思った、どうやらキャベツ達は食われたくないということで遠い地にて枯れるらしい。
ちなみに一つ一つ討伐すると報酬を貰えるらしい。
それで町の外に来たら大量のキャベツや似たようなレタスが来たので俺は召喚を使って最上位妖精５人と上位妖精１５人に中位妖精３０人と下位妖精５０人呼び出してキャベツを刈っていった。
ちなみにカズマはスティールというので羽を取って次々と収穫していてアクアは泣きながら、カズマに助けを求めながら逃げていて、めぐみんはというと。

「あれほどの敵の大群を前にして爆裂魔法を放つ衝動を抑えられようか。はあぁ・・・・・・いやない！」
めぐみんがマントを翻して前に出る。そして、めぐみんの足下に赤い魔法陣が展開される。
「光に覆われし漆黒よ。夜を纏いし爆炎よ。紅魔の名の下に原初の崩壊を顕現す。終焉の王国の地に力の根源を隠匿せし者。我が前に統べよ！エクスプロージョン!!」
と爆裂魔法を放ってキャベツを倒したけど本人は倒れてしまった、先日カズマに聞いていたのだが燃費はやはり悪いので一回使ったら倒れるとは聞いていたので驚いていない。
それから前のほうに一人の女騎士がいた。
「ふ、ふふふ……あれだけのキャベツの群れの体当たりだ……それはさぞ素晴らしいものなはずだ!!」
一人興奮している女騎士がいるけど放置しておく。
それからベルは持ち前の爪で次々討伐していきアイギスは爪と魔法により次々倒していった。

暫くしてキャベツやレタスを倒して俺達の報酬はなんと俺と妖精達で１３０万とキャベツとレタスだけでそんだけ手に入れてしまった。
アイギスは別に５０万でベルは２９万５千である、アイギス達はそれを俺に渡そうとしたけどアイギス達のお小遣いにしてそのままにした。
それでカズマは俺には届かなかったけど１００万手に入れたらしい。
それで今日の昼飯はキャベツ炒めを食べたけどとても美味しかったし、経験値も手に入れた。
それと俺の実力を知った他の冒険者が俺達を勧誘してきたが全て

断った。
　お昼を食べたあと俺達は依頼をこなそうと思って依頼状を見ていたらエレメントゴーレムという奴の討伐が有ったので向かうことにした。
　それでギルドを出て向かおうとしたら一人の女の子が話しかけて来た。
「あの、すいません、少しいいですか？」
　話しかけて来たのはめぐみんと似たような服を着た女の子だ。
「これから依頼に向かうけど少しならいいよ。」
「はい、構いません、それで私の名前はゆんゆんという名前です。」
「ゆんゆん？それってもしかして紅魔族の子？」
「はい、それで頼みがあるのですがいいですか？」
「なんだい？」
　俺が問い掛けたら何回か深呼吸をして決意を固めた顔をして俺と向き合った。
「あの、出来たら私を同じパーティーに入れさせて下さい!!!」
　頭を下げて俺にお願いしてきた、俺は他のパーティーに行くのは断っていたけどこの子なら問題ないと思い。
「あぁ、構わないけどこれからも危ない依頼とかこなしていくけど問題ない？」
　俺がそういったらゆんゆんは嬉しそうになって頷いてくれた。
「はい、宜しくお願いします!!」
「それじゃこれからエレメントゴーレムの討伐に向かうけど一緒に行くかい？それとも今日は待って明日以降にする？」
「一緒に行かせてもらいます。」
　そういって同行することにしたんだけど装備が心許ないから彼女の装備を整える為に販売店に向かい、彼女に合う装備を買ってあげようとしたけど彼女は断ろうとしたけど気にせず俺が払いゆんゆんは受け取ってくれた。
　ちなみに魔法を半分ほど防いでくれるマントに杖も威力を上げてくれる最高級の杖をあげた、総額２４５万したけど俺は昨日の稼ぎで

気にしなくていいと言ったけど「すぐには無理ですけどちょくちょく返していきます!!」と言われたのでその時その時理由を着けて断ればいいかと思いながら聞いていた。
　そのあとは必要そうな物を買ってからエレメントゴーレムのいる廃村に向かった。
　ちなみにどうやって向かったのかは、アイギスとベルが元の狼の状態に戻って俺達を乗せて向かってくれたので、歩いて向かったら3時間掛かるのが僅か30分程で着いてしまった。
　それで目標を探して廃村に入ると壊れた家等があり、人の気配を全く感じなくて廃村の中心に着いたら色とりどりのゴーレムらしきやつがいたので俺は早速ゆんゆんにやれるか聞いてみたら緊張しながらだけどやってみるといって向かいゴーレムが気付かないギリギリの所で止まって魔法の詠唱をして放ったのは上級魔法のサイクロンを放ち相手が上に向かっている間に今度はライト・オブ・サイバーという光の魔法でエレメントゴーレムを見事傷つけたが倒しきれず起き上がるがゆんゆんは慌てることなく魔法の詠唱をして放ったのは氷の魔法のブリザードを使い凍らせて闇魔法のダークブレードという中級魔法で切り着けて今度こそ倒した。
　けとそれにより魔力を失って膝を着いたので肩を支えて起き上がった。
「お疲れ様、凄いね、俺達の手助けを無しにやるとは。」
「いえ、これぐらいやらないとライバルには勝てないので。」
「そうか、そのライバルに勝てるといいな。」
「はい!!」
　嬉しそうに頷いている、ゆんゆんでこれならそのライバルもとても強いのだろうと思っている。
　実際は身近にいるめぐみんなんだけどその時は気づかなかった。
　そうこう話している間にゆんゆんも一人でたてるようになったのでまたアイギスに乗って帰った。
　ちなみに成功報酬はゆんゆんが一人で倒したのでゆんゆんに全てあげたよ、さすがに、それにゆんゆんいい人過ぎない？この成功報酬

も半分にしようとするし、それと今回の成功報酬の金額は１５０万だった。

第6話

ゆんゆんがパーティーになってから翌日俺はギルドに来て何をやろうかと悩んでいたら、いつも受付をしてくれる女性のルナさんがこちらに近づいてきた。

「すいませんアラタ様、アラタ様にお手紙が届いています。」

そういって渡してくれたのは白い手紙に何とベルゼルグ王国の王族の印があり中身を確認する。

アラタヨウヘイ様へ

貴方を王国の城にご招待する為にこの手紙を送らせていただきました、迷惑でないのでしたら、どうぞ私の城へ来てください、貴方のご来訪をお待ちしてます。

第一王女　アイリス

どうやら俺は第一王女に呼び出しのお誘いだった、それに呆然とした、俺はどうしようか悩んだけど向かうことにする、それで向かう方法はどうやら転移魔法で直ぐ様迎えるらしいので行くことにした、それからアイギスとベルとゆんゆんにはこれから王都に向かうと言って今日は冒険に行かない事を伝えた、けどゆんゆんとベルが三人で依頼をやってみたいと行っているのでその辺は自由にしていいと伝えて俺は王都に向かった。

転移して着いたのは王都の冒険者ギルドで事情を聞いていたのか王城への行き方を教えてくれたのでその通りに向かったら見事な王城があり、門番がいたので手紙を渡したら直ぐ様通れるようになり中にいたメイドが案内してくれて着いたのは豪華な扉の前でその扉をあけたら見た目は１２、３歳と思える金髪の可愛らしい女の子であ

る。
「あ、お待ちしておりました、私が貴方を呼ばせてもらいましたベルゼルグ・スタイリッシュ・ソード・アイリス　と言います、以後お見知りおきを。」
華麗にスカートの所を少しつまみ、上品に頭を下げた。
「これはご丁寧にどうもありがとうございます、それで何故俺を呼び出したので御座いましょうか？」
俺がそう問い掛けたら可愛らしい顔が赤くそまり決意を固めた顔をして俺に話した。
「あの、出来れば私の付き人をして貰えませんか／／／／!!」
「……え？」
俺は驚き過ぎて目を点にして混乱した、暫くして復活したので。
「何故俺に頼んだのですか？」
俺が問いかけるとアイリス様は顔を真っ赤にして俯きながら話してくれた。
「あの、じつは、３日ほど前に貴方に偶然お会いになりましてその……一目惚れです／／／／／／／／／／／／／／。」
そういわれて俺は思い出していた、たしか３日ほど前とは俺がこの世界に来てギルドに向かう途中に俺の目の前で転びそうになった顔を隠した女の子がいてそれを俺は支えてあげた記憶があるなと思い出していた。
それにまさか俺に一目惚れとは……。
ちなみに彼はそこまで鈍感じゃなく、むしろ鋭い程である、勿論なのは達が彼に惹かれてる事も知っていたのである。
それからはお互い黙ってしまい時計の秒針の音だけがやたらと響く、暫くしてようやく立て直せたので。
「俺はこれからも冒険者としてやっていき、目標は魔王討伐なので、すいませんが断らせてもらいます。」
頭を下げて断った、それでアイリス様の顔を見たら、何でか笑って

いた、まるでそう言われることを想定していたと思える笑顔だったのだ。
「やはりそうでしたか……ならば私《イリス》として貴方のパーティーに入れさせて下さい。」
そういって壁に飾られていた見事な剣を持って俺のパーティー入りをお願いしてきた。
たしかアイリス様はドラゴンスレイヤーと言われるほどの剣使いとも呼ばれているので実力もありすぎる程であるらしいのだ。
けど、いいのだろうか？確かにアイリス様を入れたら助かるけど王女様だぞ!?それで暫く考えた結果。
「本当にいいのですね？」
「はい、構いません!!!」
俺は自信満々のアイリス様を見て諦めて。
「分かりました、イリスを我がパーティー入りを認めます。」
そういったら嬉しそうに抱きついてきた、まだ１２歳ので背は小さいけど一部ちょっとそこまでではないけどこの年にしては大きいと思える物が当たっている、どうやらアイリス様のお母さんはスタイル抜群で胸もとんでもなく大きいらしい。
そのあとはアイリス様改めてイリスと一緒にギルドに戻り町に戻ってアイギス達に紹介した。

それから時は過ぎてお昼過ぎ、どうやら午前中はゆんゆん達は一撃熊の依頼をこなして成功報酬１００万もらったので今度は成功報酬最高の８００万というファイアドラゴンというドラゴンの討伐があったのでそれを受けることにした、ちなみにゆんゆんは今日はもう

来れないと言うことになった。
それでまたアイギスに狼の状態に戻ったらイリスが驚いていたけど直ぐに慣れて背中に乗ってはしゃいでいた。
そんなことがあって暫くしてファイアドラゴンがいるという火山に来た。
ちなみにイリスの装備はドラゴンスレイヤーと言われるだけ合って最高級だった。
それで火山の中腹にいるらしいので向かったら体長２０メートルはあるであろうドラゴンがいたので今回はイリスに頼んだ。
イリスは高速で切り着けて行きそれに対抗するように腕による横凪ぎや尻尾を使って攻撃するが全てイリスは避けていてドラゴンは火のブレスをしようとしたけどイリスは防ぐ為に顎を切り着けてブレスを防いだ後少し離れてイリスはセイクリッド・エクスプロードを放ち、ドラゴンを真っ二つにして倒した。
ていうかオーバーキルな気がするなと思いイリスを見たら満足しながら笑っていた、本人が満足しているならいいかと思い町に戻り報告に向かった。

ドラゴンを討伐し終わり町に戻ったらアクアが檻に入り目のハイライトをけして何か呟いている、そしてカズマ達一行がそれを運んでいる、何てカオスな集団だと思ったし、アイギスやイリスがドン引きしていてベルは不思議そうに見ている、それと何でか先日キャベツの前に立ってキャベツの攻撃をずっと受けていた女騎士もいる。
「カズマ、何があったんだ？」
「陽平か、実はな……。」
何でも今回の依頼で必要な檻でやったのだがそこで死にそうな経験をしてこのような状態になったらしい。

それは……お気の毒様だな、そう考えてると。
「女神様ではないですか!?」
そういって話しかけて来たのは一人の男でその後ろには二人ほどの女性がいる。
「あんた誰よ?」
「僕です、ミツルギキョウヤです、貴女様からこの魔剣グラムを頂き、この世界に転生したミツルギキョウヤです。」
「「え?」」
「あ～そういえばいたわね、いや～何人も送っていたから忘れちゃったわ。」
「お久しぶりです女神様、貴女に選ばれし勇者として日々頑張っていますよ、ところでアクア様は何故ここにいるのですか?」
カズマ達はキョウヤというものにあらましを伝えると…
「はぁあああ!!?女神様をこの世界に引きずり込んで!?しかも檻に閉じ込めて泉に浸けた!?君は一体何を考えているんですかぁ!?」
キョウヤはカズマの胸ぐらを掴みながら怒っているようだ、まぁ、確かにそういえる事もあるがこれが最善策でもあるしカズマの話をろくに聞かないこいつは好きになれないな。
「ち、ちょっと私として結構楽しい日々を送っているし、ここに連れてこられたのはもう気にしてないし!」
「アクア様!こんな男にどう丸め込まれたか知りませんが…貴女は女神ですよ!それがこんな…!」
(言いたい放題だなこの野郎…アクアの事ろくに知りもしないくせに)
「なんだ?」
「女の取り合いか?」
おいおい…ここにいる皆の注目を集めているぞ
「…ちなみに、アクア様は何処に寝泊まりしているのです?」
「んー…馬小屋。」
「…っ!」
これを聞いてキョウヤは胸ぐらを掴んでいる手に力を込める

「おい、いい加減その手を離せ、礼儀知らずにも程があるだろ。」
「ちょっと撃ちたくなりました。」
「それはやめろ、俺も死ぬ。」
「君たちは…クルセイダーにアークウィザード、それにソードマスターと拳闘士と…なるほど、パーティーメンバーには恵まれているんだね。」
　ちょっと待て、もしかして俺達も含まれているのか？
「君はこんな優秀そうな人達がいるのに、アクア様を馬小屋に寝泊まりさせて恥ずかしいと思わないのか。」
「んー…ん？（こいつはきっと、転生の時でもらった魔剣グラムとやらで、何の苦労もせずに生きてきたんだろう、そんな奴なんで1から頑張ってきた俺が上から説教されなきゃならないんだ？）」
「君たち、これからはソードマスターの僕と一緒に来るといい、高級品の装備を買い揃えてあげよう。」
「ちょっとやばいんですけど、あの人本気で引くくらいやばいんですけど。」
「どうしよう…あの男生理的に受け付けない、攻めるより受けの方が好きな私だが、あいつは無性に殴りたいのだが。」
「撃っていいですか、撃っていいですか。」
「私は主以外とは行きません。」
「私も離れるつもりはありません。」
「俺も断る。」
「えぇーっと、満場一致で貴方のパーティーには行きたくないみたいです、んじゃあこれで。」
　そう話をしめたと思ったら。
「待て！」
　…しつこい。
「どいてくれます？」
「悪いが、アクア様をこんな境遇に置いてはいけない、俺と勝負をしないか、カズマ。」
　決闘か、まぁ、その方が手っとり早いな。

「もし僕が勝ったらアクア様を譲ってくれ、君が勝てばなんでもひとつ言うことを聞こうじゃないか。」
「よし乗った、いくぞぉー!!」
おいカズマ流石に卑怯だぞ？
「ちょ!?まっ！」
「スティール!!」
一瞬の光が放ち、目を開ければ、キョウヤが持っていた魔剣グラムとやらは、いつの間にかカズマが持っており剣の向きを変え、そのまま振り下ろし、キョウヤは気絶した。
「よし、これで俺の勝ち。」
「卑怯よ!!」
キョウヤのつれていた女の一人が叫んでもう一人は何回も頷きながらこちらを睨んでいる。
「確かに誉めるべき行動ではないな。」
俺がそういうとカズマは驚きながら見て女の二人は笑顔になる。
「けど、勝つための最適解でもあると俺は思う。」
そして今度はさっきの逆の通りになった。
「それにソードマスターであるキョウヤにカズマが勝てる方法はあれしかなかったしな。」
俺がそういうと女二人は苦虫を潰したみたいな顔をしてキョウヤを連れて離れていった。

第7話

キョウヤの出来事が終わった夜俺達は宿に戻り今日もなのは達を呼び出して話していたのだが。
「すいませんヨウヘイ様、少しよろしい……です……か……。」
「え？この女の子は誰なのかな？」
なんとイリスが入ってきてなのは達を見て驚いてそしてなのはがその子を見て黒いオーラを出してきた、え？何で黒いオーラを出すの？あのこはまだ子供だよ？流石に手を出さないよ？
「あ、あぁ、その子はイリスといって今日から俺のパーティーに入った子何だよ、それでイリス、ここにいる皆は俺が異世界から召喚した者達だよ。」
「あ、そうですか、どうもはじめまして私はイリスといって今日からヨウヘイ様のパーティーに入らせてもらった者です。」
「そうですか、私の名前は高町なのはです、それでこの子が私の娘のヴィヴィオだよ。」
「どうもはじめまして私がなのはママの娘の高町ヴィヴィオです!!」
「それで私がフェイト・テスタロッサです。」
「私はフェイトの姉のアリシア・テスタロッサだよ!!」
「次は私やな、私は八神はやてや、よろしくな～。」
「私の名前はティアナ・ランスターよ、よろしくお願いね。」
「私はスバル・ナカジマ!!よろしくね!!」
「私はスバルの姉のギンガ・ナカジマだよ、よろしくね。」
「僕の名前はエリオ・モンディアルです、よろしくね。」
「私はキャロ・ル・ルシエです。」
「まだその他にもいるけどこの子達はとある異世界から呼び出してほぼ毎晩話したりしてるんだ。」
ちなみにこの事はアイギスとベルも知っている事である。
「イラ……そうですか、それなら今後は必要ありませんね？」
「は？」

いや、どういうこと？
「寂しいから呼び出したんですよね？それなら今後は”私が”寂しくならないように寄り添いますから。」
どうやらイリスは勘違いしているようだ。
それで俺がそれを否定しようとしたが。
「イラ……それこそ貴女は必要ないと思うな、貴女じゃ陽君を満足出来ないしね。」
先程の話を聞いてイラついたなのはが胸を強調しながら言ってきた、それに他の女子メンバー全員が面白く無さそうな顔をして俺とエリオは抱き締めながら震えている。
《陽平さん、何とかしてもらえませんか!?》
《済まない、俺には無理だ!!!》
念話してきたが俺には解決何て今のなのは達には無理だ。
「そうですか……ふふふふふふふふふ。」
「そうだよ……あはははははははは。」
お互いが不気味に笑いだしてきた、正直今すぐにでもこの部屋を逃げ出したいと思った。
そのあとは寝る時間になったのどイリスを部屋に戻ってもらってなのは達には帰ってもらった。

なのはとイリス達が修羅場が起きた数日、ここでの依頼を殆ど満足出来ず他の皆と王都の依頼をこなして今日はこちらに戻ってきてギルドに向かったら。

『緊急！　緊急！　全冒険者の皆さんは、直ちに武装し、戦闘体制で街の正門に集まってください！　……特に冒険者サトウカズマさんとその一行は、大至急でお願いします！』

おいおい穏やかじゃないな……それにカズマは何をしたんだ？

それで門の正門に向かったら何やら魔王軍幹部のデュラハンとその部活らしきアンデッドの群れがいた、あれが魔王軍幹部か……確かに強そうだな、幹部だけあって。

そんなことを考えているとデュラハンがカズマ達を確認したら。

「なぜ城に来ないのだ、この人でなしどもがああ!!」

……人でなし？　何を怒っているんだ？訳が分からずカズマに聞こうとしたら。

「もう爆裂魔法撃ちこんでもいないのに、何怒ってるんだよ。」

どういうことか他の人に聞いたらどんやら俺がここにいない間にめぐみんが毎日とある城に行って爆裂魔法を放っていて、しかもそこにはあのデュラハンが住んでいてイライラしてこの町に来てもうさせないようにして去ろうとするがめぐみんは挑発して死の宣告を受けそうになるがそれを女騎士のダクネスが庇ってデュラハンは城に来るようにしたのだがアクアが死の宣告を消して普通に過ごしていたらしい。

それで勘違いして来たようだ、現に話を聞いてる間にデュラハンはダクネスが生きている事に酷く驚いているな、それでそのあとはアクアが馬鹿にしてそれにキレたデュラハンがアンデッドをこちらにけしかけてきたので俺は直ぐ様頼れる仲間を”全員”呼び出した。

「頼む皆、あそこにいるアンデッドを残さず蹴散らせてくれ。」

「うん、わかったよ、アクセル・シュート!!」

「ハーケンサイバー!!」

「サンダーレイジ!!」

まずはなのはとフェイトとアリシアの先手によって倒していき。

「それじゃ殲滅するで、ブラッディダガー!!」

はやての広域殲滅魔法によって次々と倒していき他の皆は個別にたおしていくので俺は直ぐ様デュラハンに近づいた。

「済まないがお前はここで倒させてもらう。」
俺は以前はやてに頼んでモードを追加してもらったトリニティの居合の刀を出した。
「お前はソードマスターか……。」
どうやらこいつも勘違いしているようだ。
「違う、俺は召喚師だ、あそこで戦っている者達を呼び出したんだよ。」
「何!?そんな職業があるのか……だがお主は誰も連れていないということはお主も強いのだな?」
「ほぅ、分かるか、確かに俺はあいつらよりも強い自信があるぜ?」
「そうか、ならば一騎討ちを頼む。」
「それは願ってもない事だな……。」
そういって俺は刀を直ぐ抜けるようにしてデュラハンは剣を持って戦う準備を終えた。
暫く静かにして。
「「まいる!!!」」
俺とデュラハンは高速で近づき

デュラハンを者の見事に体を真っ二つにした。
「見事だ……まさかここまでやるとは。」
「けどあんたも凄いよ、俺に攻撃を与えたのは久しいよ見事だったぞ。」
俺には腕から血が出ていたが俺は直ぐ様回復魔法を使い傷を治した。
「そうか……▪お前ほどの相手に斬られるのも悪くないな……。」
「そうか。」
「出来れば死ぬ前にお前の名前を聞きたい。」
「そうか、俺の名前は新田陽平だ。」
「そうか……我の名は……ベルディアだ。」
「そうか、なら安らかに眠れ、セイクリッドターンアンデッド。」
そしてデュラハンであるベルディアは死んで町の平穏は保たれた。
そしてその夜ギルドにて全てタダの宴会が始まった。
勿論呼び出した皆も参加している、俺が呼び出したということでギルドの人や冒険者も歓迎してくれた、そして今度からはここにも来ていいということで話がついた。
けどなのは達を見たカズマが凄く驚いていたな?何でだろ?

どうも佐藤カズマだ、今日ベルディアが攻めてきたのだがそれを陽平が解決したのだがそれで召喚したのはなんと魔法少女リリカルなのはに出てくる人たちだからだ、おまけに陽平にはその作品に出てくるデバイスを持っているしどういうことだ!?その事をアクアに聞いたら、何でかは知らないらしい、とにかく高校生の間に亡くなった人

を呼び出しているかららしい。
これは陽平に聞かないといけない事があるな。

そして時は過ぎて皆も楽しんでくれたので皆を帰して俺は他の冒険者も帰っていってギルドの中は食器等が錯乱していてギルドの役員が片付けていたので。
「あの、手伝いますよ。」
「え!?そんないいですよ。」
断ってきたので俺は無理矢理彼女の持っていた食器を持って。
「別に構いませんよ、家事等は得意だったのでこの位は楽勝ですから。」
俺はそのまま食器を沢山持てるだけ持って洗い場までを持っていったらルナさんが洗っていたのでその隣に陣取り洗い物をする。
「ア、アラタ様!?そんな悪いですよ!?」
「気にしな～い気にしな～い。」
そういって的確にこなしていきあっという間に終わらせた、そのあとはギルドの役員さんたちはお礼を言ってきたので。
「気にしないで俺が好きだからやったことだから。」
俺がそういうと再びお礼を言われて帰ろうとするが。
「すいません!!アラタ様少しよろしいですか!!」
そういって走ってきたのはルナさんだった。
「どうしたんですか?」
「すいませんアラタ様に魔王幹部のデュラハンを討伐したので特別報

酬として三億が貰えます。」
　三億!?そんなに貰えるのか、と俺が驚いていると。
「ですが、その報酬が貰えるのは明日の昼間で恐らく他の冒険者が来ているのです。」
　それに何の不都合があるんだ?と俺は思ったが、と俺はとある存在を思い出した。
「あ……もしかしてアクアの事か?」
「はい、恐らく……。」
　恐らく俺が三億をあいつの目の前で受け取ったら大変な事になりそうと簡単に想像出来てしまった。
「すいません、今の時間で空いてる不動産等はありませんか!?」
「はい、そういうと思って用意しておきましたのでこちらです。」
　そういって出してくれたのは、ここから少しだけ離れた空き地に一軒家があり、かなり広く庭等も広大で値段は少し高いけど約一億で買えるらしいので直ぐ様買い直ぐ様イリスとアイギスとベルとゆんゆんを呼び出してそれになのは達を召喚して引っ越しを手伝って貰った、その間僅か一時間であった。
　そして翌日俺は俺の一軒家に王からの使者が来て俺に三億くれたので直ぐ様不動産に向かい一億を一括払いした

第8話

デュラハンの事件から翌日俺は買った屋敷のお金を払いそのあとは今日の朝食をギルドで食べていると今日は珍しくカズマが午前中から来て俺に近づいてきた。
「陽平、聞きたい事があるんだがいいか？」
「いいか、何だ？」
「昨日デュラハンと戦っているときにリリカルなのはに出てくるデバイスを使って戦っていたよな？」
「？リリカルなのは？何だそれは？それになのはってもしかしてなのはちゃんの事か？」
俺はカズマにリリカルなのはと言われたが何の事か分からない。
「え？リリカルなのはを知らないのか？」
「？」
どういうことだ？何やら何か勘違いしているかも知れないな。

カズマに聞いたらどうやら俺が呼び出したなのはちゃん達はカズマがいた地球のアニメになっているらしい。
けどそれにはアリシアは死んだままでプレシアも助からなくてリインフォースアインスは消えたらしい。
「多分だけどカズマのいた世界のアニメになっているのは俺がデバイスを手に入れていない世界何だろうな。」

「そうなのか？」
「あぁ、だってアリシアは俺の二回しか使えない死者蘇生を使ってプレシアは俺のデバイスに入っていたダ・カーポゼロを使って病気になる前に戻したからな、それにリインフォースアインスには同じくダ・カーポゼロを使ってひたすら戻したからな。」
「なんだそれは……その時点で十分チートやろうじゃないか。」
それを言われると何も言えなくなるな。
そのあとは俺の世界の事を教えてカズマの話を聞いて午前中は過ごした。

午後になってゆんゆんが合流出来たので依頼をこなそうと思い探したら、カズマ達が冬妖精の討伐に向かったらしく俺は嫌な予感を感じていたらイリスが冬妖精を倒しまくると冬将軍が出てくるらしくそいつがとんでもなく強いらしい、それで俺は慌ててカズマ達を追いかけた。

俺がカズマに追い付いた頃には冬将軍が出ておりダクネスを除い

た皆が土下座をしていた。
俺は直ぐ様トリニティをセットアップして近づいた、そしたら冬将軍がカズマの首を斬ろうとしたので俺はそれを阻止した。
「陽平!?」
「無事か!!カズマ!!」
「あぁ、大丈夫だ……。」
「そうか、なら俺が押さえてる間に離れていろ。」
俺がそういうとカズマ達は離れてくれたので冬将軍から離れて。
「確かに強いけど!ベルディア程じゃないな!!」
そして俺は冬将軍に近づき一刀両断した。
「ふぅ、これでいいだろう、大丈夫か?」
「あぁ、さすがに駄目かと思ったよ、ありがとうな。」
「何、気にするな。」
そしてカズマが何でここにいるのか聞かれたから俺は冬将軍の事を聞いて嫌な予感がしたからきたと正直に話した、そんなことがあって俺達は一緒に帰った。

ちなみに冬将軍の賞金は一億で、それを聞いたアクアがめっちゃ媚ってきた、やっぱりベルディアの事を話さなくて良かったと思ったよ。